

失われた TOKIOを求めて

高橋源一郎

Takahashi Genichiro

はじめに わたしがTOKIOを歩いたわけ

健康のために散歩をするようになった。鎌倉に住んでいるので、寺の間の小道を抜け、海岸に出て、観光客の姿のない道を選んで歩くことにしている。ぐるりと一回りする、いつも決まったコースだ。だから、目の前を見慣れた風景が通りすぎてゆく。

あるとき、なんとなく、同じ道をいつもとは逆向きに歩いてみた。驚いた。同じ道を歩いているはずなのに、目にする風景がまるでちがうのである。もしかして道に迷ったのでは？ そう思っ、道のまん中で止まってしまったのも一度ではない。周りを見ずに、ただ歩いていただけなのだ、と思った。

そのとき、稲村ヶ崎の近くの少し奥まったあたりで、崩れかけたブロック塀が目に入った。いつもの方向ではわからなかったが、逆方向からは見えたのである。なんとなく見たことがある気がして、しばらく立ち止まっていた。不意に気づいた。四〇年以上前、肉体

労働をしていた頃、自分で積んだブロック塀だったのである。そのころ、わたしは、まだ二十代半ばだった。そして、すぐ近くの寺に水をもらいにいったことも思い出した。ブロック塀の中にあつた家はもうなくなつて、更地になつていた。なにかが蘇ってくる気がしたが、それを正確に言い表すことは難しい。

それからは、散歩をするときの気分が少しちがうようになった。もう少し、周りを見ながら歩くようになったのである。

久しぶりに、東京を歩いてみたくなつた。わたしが初めて東京に來たのは六歳のときで、そのときの風景はほとんど残っていない。

歩いていると、鎌倉で逆向きに散歩したときのように、過去の風景が蘇ってくるこゝがあつた。そこには、もう存在しない、わたしの過去の時間が埋めこまれているようだったが、それは、誰にでもある経験だろう。

誰の目にも同じように見える、現在の東京の風景の向こうに、わたしの時間が埋めこまれた、別の東京の風景があるように思えた。それを、わたしは、仮に「T O K I O」と呼んでみた。それは、近未来的な東京の呼び方であると同時に、その中に「T O K I (時)」

が入りこんだ名前でもある。

わたしの「TOKIO」は、わたしにしか見えない。けれども、東京に住む人たちは、東京に関わりのある人たちには、みんな、それぞれの「TOKIO」があるのだと思う。

歩きながら、かつての東京について書かれたものをいくつも読んだ。そこにもまた、たくさんの「TOKIO」があった。歩きながら、そんな、無数の「TOKIO」について考えるのも楽しかった。いや、当たり前のことだが、「TOKIO」はどこにでもあるのだ。東京以外のあらゆる場所にも。

この本を読んで、みなさんが、みなさんの「TOKIO」について、思いを馳せてくれるなら、そして、頁を閉じ、久しぶりに歩いてみようかと思ってもらえるなら、それ以上の喜びはありません。

目次

はじめに わたしがTOKIOを歩いたわけ

3

御茶ノ水 文化学院、夢の跡 二〇一九年二月四日

9

新国立競技場 戦争とスタジアム 二〇二〇年四月一日

31

新宿 都庁舎で都知事選を 二〇二〇年六月三〇日

51

上野動物園 あつまれ動物の森 二〇二〇年一〇月六日

69

明治神宮とはとバス

「東京の歩き方」を片手に

二〇二〇年二月三一日

トキワ荘マンガミュージアム

マンガが若かったころ

二〇二一年三月二五日

三鷹の森ジブリ美術館 宮崎さんの話

二〇二一年七月五日

渋谷 天空の都市と地下を流れる川

二〇二一年一月二一日

皇居 長いあとがき

二〇二一年一月三〇日

参考文献

写真

編集部

御茶ノ水

文化学院、夢の跡

二〇一九年二月四日



残された文化学院の看板の前でポーズをとる作家。
蔦の張りつく壁に青く錆びたプレートがあった。

炎上

およそ半世紀も前のことだった。週に何度か、わたしは御茶ノ水駅に降りた。降りると、いつも、ツンとくるような臭いが漂っていた。機動隊が発射するガス弾の「残り香」だった。そして、その臭いを嗅ぐと、いつも、胸の動悸が激しくなるのだった。

駅の周りをジュラルミンの楯を並べた機動隊員が取り囲み、降りてくる学生を睨みつけているときにも、ひそかに考えていることを見透かされているのではないかと思い、改札口を出て、下を向いて歩きながら、やはり鼓動が高まるのだった。

この間、テレビで香港でのデモ隊と警官隊がぶつかり合うシーンを見ていたら、知人のひとりから電話がかかってきた。

「見てる？」

「見てるよ。テレビ」とわたしは答えた。

「×××を見ろよ」

知人はインターネットで香港から二四時間ライブ配信をしているサイトの名前を教えてくださいました。

「ずっとやってるよ。道路と大学だ」

おびただ

夥しい数の黒いマスクをしたデモ隊と警官隊が激しく衝突していた。警官隊の側から次々とガス弾が発射され、煙の尾を引いていた。そして、何人もの若者が引き倒され、その場で殴られたり蹴られたりしていた。まるで、自分が引きずり倒されているような気がした。画面が切り替わって大学が映り、そこでは、夥しい数の火炎ビンが構内から投げられ、地面に落ちて、そのたびに炎が舞い上がった。

「同じだね。あの頃と」

わたしはうなずいて、そうだ電話で話していたのだ、と気づいた。

「半世紀もたつのに、まるで変わらない」と、電話の向こうで知人はいった。

いや、とわたしは思った。彼らには、守るべきものがあって、そのために戦うべき相手と戦っている。それが「ふつう」だ。いまは？ 守るべきものはないのか。戦うべき相手はいないのか。どうやら、そうらしい。この国では、もうあんな「市街戦」を見かけることはない。

画面の向こうで、十数人の、おそらくは学生たちが後ろ手に手錠をかけられて座らされていた。疲れたような、同時に安堵したようなその表情は、ひどく幼いようにも見えた。

門とシャンデリア

久しぶりに御茶ノ水駅を降りて、少し歩いた。どの街よりも若者の姿が多い、と思った。いまでも、大学の街であることに変わりはない。けれど、このあたりを歩いていると、時々、どこを歩いているのかわからなくなる。知らない場所に迷いこんだような気がするのだ。おそらく、わたしの中に、まだ「あの頃」の地図があつて、その地図にはない風景を見ると、どこを歩いているのかわからなくなるからだろう。

ある大学の、超高層の建物の前を通るたびに、いつも不安な思いにかられた。いや、少し鼻がムズムズした。ここには、かつて別の建物があつて、その前の道路は、いつもいちばん激しく「炎上」していたのだ。その建物の脇を通り、ゆっくり坂道を登つてゆく。もう大丈夫。ムズムズ感はなくなった。やがて、蔦^{つた}におおわれたアーチ状の小さな建物、いや門が現れた。その横には、見上げるような大木が何本も生えていた。ここが、都心の一角だとは誰も思わないだろう。

「あの頃」にも、この場所にこの門はあつた。けれども、わたしは、この小さな丘の下の道を大きな声をあげ、手には石を持って、走り回っていた。少し離れたところに、こんな静かな場所があることを知らなかった。わたしの「地図」には、この場所は存在しなかつ



近代的な建物が並ぶ「とちの木通り」に忽然と現れる元・文化学院の門。

たのである。

わたしが、その「門」を訪ねたのは、急速に冬が近づいてくる頃で、鳶も、その傍らの樹木の葉も、緑ではなく少し茶色っぽくなっていた。

その、まるで別の時代からやって来たような、威厳に満ちたアーチ状の門をくぐると、入る者たちを圧倒するような高層ビルが控えていた。

アーチをくぐろうとすると、すぐ横の壁に緑のプレートが埋めこまれているのがわかった。

「文化学院創立の地

1921年4月に文化学院は、西

村伊作 与謝野鉄幹 与謝野晶子 石井柏亭らによつてこの地に創立され、その他
山田耕柞 河崎なつ 有島生馬 高浜虚子らが教鞭をとつた。その後、菊池寛 川端
康成 佐藤春夫ら著名な文学者もつづいて加わつた」

わたしは、その近くにもうひとつ、もっとずっと古い、青い金属の錆びが目立つプレー
トも見つけた。そちらの方は、ただ、この文字だけが刻まれていた。

「文化学院

BUNKA GAKUIN

1921創立」

江戸時代、神田地域は、町人地と武家地が密接した場所だった。明治維新の後、旧幕府
直轄地は政府に接収され、そこに官立学校が設置される。以降、近代日本の教育の中心地
として、私立の学校がその後を追うように建てられていった。東京法学社（現・法政大学）
の創立は一八八〇（明治一三）年、同じ年、専修学校（現・専修大学）も創立されている。



建物内部へと続く優雅な階段は文化学院時代の遺産。現在は日本BS放送(BS11 イレブン)所有。

翌一八八一（明治一四）年が明治法律学校（現・明治大学）、一八八五（明治一八）年が英吉利法律学校（現・中央大学）、一八八九（明治二二）年が日本法律学校（現・日本大学）である。官民一体となって、近代国家創出のため、有為の人材の輩出を競っていた。その中心地が、神田・お茶の水だった。

ところが、その近代国家揺籃の地のはずれに、他の学校群とはまったく異なる理想を求めて、ひとりの男が「文化学院」という名前の、夢の学校を作った。およそ百年前、一九二二（大正一〇）年のことである。いま、その場所を思い出すことができるのは、古いアーチ状の門とプレート、そしてその先にある優雅な階段だけだ。

門を抜けると、豪華な舞踏会へ向

かうために作られたような階段がある。わたしはゆつくりと上がっていった。高い天井にはシャンデリアがあった。そして、時代を感じさせるタイル敷きのフロアには、趣味のいい木製の机と椅子がいくつも置かれていた。白い壁に取り付けられたランプもまた、昭和の、いやもしかしたら大正の雰囲気を感じさせているようだった。けれども、そこまで。目の前にある、白い塗り壁の中にくり抜かれた小さな入口をくぐり抜けると、もうそこは、超モダンなビルのフロアだ。

現代へと繋がる、その入口の手前のフロア。そこに、柔らかいシャンデリアのオレンジの灯に照らされて、ぼんやりと椅子と机が浮かび上がっていた。場違いといえば場違いだ。そんな優雅な空間は、いまの社会では居場所がないのだ。

そこには誰もいないはずなのに、わたしには、ざわめきのようなものが聞こえてくるような気がした。遙か遠い、時の向こうから、である。

地上に天国を作る

一九二〇（大正九）年の夏のことだった。近代短歌の巨人として知られる与謝野鉄幹・晶子夫妻は、長野県沓掛^{くかけ}の別荘に、西村伊作と、その友人で中学教師をしていた河崎なつ

らを迎え、「芸術合宿」という名の共同生活をおくっていた。伊作は、長女のアヤ、長男の久二、叔父の大石誠之助の長女、ふかを伴って参加していた。見わたすかぎりの高原には、秋の草があふれだしていた。おとなも子どもも、みんな、秋の花であるネジバナをスケッチすることにした。みんなの絵を見ていた晶子は、アヤの描いた絵を見ると、こういつた。

「絵の天使ね」

その後、みんなでお茶を飲み、のんびり話をしていると、西村伊作がこんなことをいつた。

「アヤは四月から女学校に行くのだけれど、東京には良い学校があるでしょうか」
女子の教育事情に詳しい河崎がこう答えた。

「女学校はいま行き詰まっています」

すると、それまで黙ってみんなの話を聞いていた晶子が、強い口調でこういつた。

「西村さん、アヤちゃんのはいる、学校を作ったらどうです」

それに呼応するように、鉄幹もいつた。

「西村君そうしたまえ、こないだ娘さんを、立派に成長させることは愉快な立派な事業

だよ君」

この夕刻の会話の後、伊作は、彼にとっての「地上の天国」、文化学院の設立に向けて一気に走り始めるのである。

バカなことだ。現代の我々なら、そういうだろう。いまでは、新しく学校を作るのは、たいいてい金目当ての連中ばかりだ。時の首相の友人とか、なんとか特区に優先的に入れるとか。ところが、西村伊作は、自分の子どもたちのために学校を作ることにした。それも、世界に一つしかない、夢のような学校を、だ。百年前の当時も、伊作の学校は「夢物語」だと考える人間は多かったのである。

その頃、あの詩人で偉大な童話作家の宮沢賢治は、花巻農学校で教師をしていた。そこでの彼のルールは「先生の話を一生懸命聞くこと」「教科書は開かなくていいこと」「頭でなく体で覚えること」だった。文部省や国のルールには従わなかったのだ。

賢治は、国語の時間には、前日書き上げたばかりの「風の又三郎」を朗読して、子どもたちを喜ばせた。伊作が生きた大正、明治と昭和という国の抑圧が強い時代に挟まれた、小春日和のような時代に、いくつもの「自由な教育」を標榜する学校や、賢治のように自由な先生が生きられる場所があった。そんな奇跡の時間は長くは続かなかったのだが。

生活と芸術

西村伊作は一八八四（明治一七）年、和歌山県新宮町に生まれた。その新宮の後背には、神秘の地・熊野が広がっていた。

伊作の父、大石余平は、新宮の名家の出身で、一八五四（安政元）年に生まれた。余平は早くからキリスト教に親しみ、一八八四年に新宮にキリスト教会を建てた。それから三カ月後、伊作が生まれた。伊作とは「イサク」、旧約聖書でアブラハムの息子として知られる名前である。余平は伊作を含む三人の息子たちを徹底的に西洋式（宗教的）に育てた。

伊作の身を激変が襲ったのは一八九一（明治二四）年である。その年、濃尾地震が起これ、たまたまチャペルで祈禱会に出ていた伊作の両親は落下してきた煙突の煉瓦の下敷きになり亡くなった。両親を失くした伊作は、母方の祖母・西村もんに引き取られた。もんは「吉野第一の山林地主」として知られていた。伊作は、西洋式の生活から、一気に「三百年以上の年月を経た」古い日本の地主の暮らしに入る。だが、幼い頃のキリスト教と「完全に洋風の日常生活」を忘れたことはなかった。

一八九五（明治二八）年、亡父・余平の末弟である叔父・大石誠之助が五年にわたるアメリカ生活を終えて帰国した。そのとき、誠之助は二八歳、伊作は一一歳であった。誠之

助は年の離れた兄の余平に育てられたばかりか、留学の世話もすべて余平に頼っていた。医師の資格を得て日本に戻った誠之助は、大石家の人間として、余平の遺児たちへの責任を強く感じていた。そして、彼らを引き取り、自らの手で育てることにしたのである。誠之助もまた、深くアメリカナイズされた青年であつた。その誠之助に、伊作も強く感化され、社会主義への興味を深めていった。

一九一〇（明治四三）年、近代日本最大の事件が起こつた。幸徳秋水・管野スガらの社会主義者グループが天皇暗殺を謀つたとして一斉に逮捕されたのだ。「大逆事件」である。現在では、逮捕された者たちの大半の罪状は、フレイムアップ（でっち上げ）によるものだったと考えられている。そして、叔父・誠之助もまた、紀州の社会主義者たちのリーダーとして逮捕、死刑に処せられたのである。

誠之助に連なる者として、伊作もまた、厳しい監視下に長く置かれた。この事件がなければ、伊作は、地方の一名士として生涯を終えたかもしれない。けれども、大逆事件は、伊作の運命を変えた。

伊作は、かつて関心を抱いた社会主義から離れ、「文化」へと針路を向けた。内外の芸術家・知識人たちを自宅に迎え入れるようになったのである。

大逆事件の少し前、一九〇七（明治四〇）年、伊作は結婚した。そして、一九〇八（明治四一）年、長女のアヤが生まれると、伊作は、育児を「自分のもつとも大切な仕事」と呼び、全力で家庭教育を始めた。そこには、伊作自身が親から授けられたものが再現されていた。子どもたちに西洋風の生活をさせるだけではなく、創造（芸術）を奨励したのである。

ユートピアとしての学校

伊作は、自由な学校であることを保障するため、あえて、ふつうの学校の資格をとらず、各種学校（洋裁学校や料理学校のような専門学校）として設立することにした。この頃、成城小学校や明星学園、玉川学園のような「自由教育」を標榜する、新しい学校が次々にできていた。だが、伊作の「学校」は、さらに進んだものだった。伊作は、既成の学校教育そのものを完全に否定するところから、すべてを始めたのである。

一九二一（大正一〇）年、文化学院の創設を告げる広告が、「改造」や「中央公論」など有名雑誌に掲載された。入学試験はなく、受験希望者は与謝野夫妻の自宅で面接を受けた。伊作は、受け入れる生徒を「中流以上の芸術を理解する文化的家庭の子女」に絞るこ

とにしていた。定員は四〇名ほどで、授業料は、当時最高額であつた慶應義塾大学よりも高く一二〇円だつた。学院の教育の責任者となつた与謝野夫妻は、一日の大半を学院ですごし、自分たちで作つた教科書で授業をすることになった。

美術の責任者には石井柏亭はくていがついた。官製の展覧会である文展に対抗し、二科会を立ち上げた柏亭は反アカデミズムの旗手であり、芸術教育の新しいやり方をこの学校で実験しようとした。

音楽・体育の責任者には、日本を代表する偉大な音楽家として知られる、「赤とんぼ」の作曲家・山田耕筰がついた。

与謝野夫妻、石井柏亭、山田耕筰だけではなかつた。優れた作家・芸術家たちが、伊作の構想に賛同し集まつてきた。

同年四月二四日、開校式が行われ、新しい学校がついに誕生した。

持てる最高のもの

「第一日目、教室に入つた生徒たちは、銘々の机の上に揃えて置かれた厚く立派な教

科書の重みに、本物の学問ができる予感に心を躍らせた。地理や歴史、中学代数、中学算術、これらは男子の中学校と同じものであり、そのことだけでも少女たちには誇らしかった。英語の教科書は、丸善を通して外国から取り寄せたものが使われた。さらに、既成の教科書を使うのではなく、先生方自身が特別の教科書をつくって用いた教科も多かった」(『大正の夢の設計家』加藤百合著 朝日選書)

柏亭は自分で絵の手本を描いて教科書とし、現代国語に関しては、国定教科書ではなく、晶子が新しく編纂した。教えたのは河崎なつであったが、中には、教科書中の作品の作者が特別講師として来校し、授業をすることもあった。芥川龍之介や菊池寛や有島武郎である。有島武郎は後に心中し、そのため、文部省は有島の文章を教科書から外すこととなったが、文化学院では問題にさえならなかった。

創立メンバーたちは、持てる最高のものを生徒と共有すべく、カリキュラムを組んだ。最高の芸術に触れさせ、自らの手で作り出すこと。これが、学院の目的であった。そのことによって、生徒たちの知識ではなく、魂をこそ教育しようとしたのである。

伊作は学院の創設者であったが、授業内容について口を出すことはなかった。また、学

院には規則らしい規則もなかった。規則で縛ることが常態化している日本の学校とは無縁な存在だったのである。生徒たちはみな、欠席しようが、遊んでいようが、叱られることはなかった。学院では、無限の「自由」が保障されていた。

わたしは、なぜ、この、一風変わった学校に興味を持つようになったのだろうか。もしかしたら、わたしが中学・高校時代を過ごした学校が、典型的な進学校だったからなのかもしれない。

そこで唯一、価値があるのは「良い成績」だった。それ以外のものはすべて意味がなかった。教師は「理解なんかしないでいい。解き方だけを覚えろ」と厳命した。中間・期末の試験ごとに成績が一番から最下位まで発表され、成績が悪い方から数人の生徒に、教師が直接「やめた方がいいんじゃないか。つらいだろ。公立に行ったら楽だぞ」と退学勧告を行った。もちろん、他の生徒たちの前で、である。東大や京大に行くことが当たり前で、私立大学に行く生徒は「落伍者」だった。もちろん、それは極端な例かもしれない。だが、「ニッポンの学校」の大半は、「官民一体」となって近代国家創設のための人材を生むために作られた学校と同じ精神で運営されてきた。その呪縛から逃れることができた学校はほとんどなかったのである。「文化学院」のような、稀な例を除いては。

苦難、そして

一九二三（大正一二）年七月、新しい四階建ての校舎が完成したが、その直後、予想もしなかった惨事が学院を襲った。九月一日、関東大震災が起こり、生徒たちが一度も入ることなく、新校舎は焼け落ちたのである。その日、新宮に帰省していた伊作は、震災と校舎焼失の一報を聞くと、濃尾地震で孤児になった自分のことを思い出した。だが、個人的な感慨にふける暇はなかった。伊作は、ただちに校舎の仮建築にとりかかり、地震から僅か三カ月足らずのうちに、授業ができるところまでこぎ着けたのである。

震災は、豊饒だった大正文化の息の根を止めた。だが、伊作の文化学院は、少しずつ形を変えながら生き延びた。

一九三〇（昭和五）年、文学部に創作やジャーナリズムを学ぶ専攻科が設けられ、文学部長に文壇の大御所である菊池寛が就任した。菊池寛は、その人脈を駆使し、昭和文学の担い手たちを惜しげもなく講師として任命したのである。川端康成、横光利一、中河與一、小林秀雄、阿部知二、等々、当時の有名文士を網羅する陣容だった。

「川端康成は型どおりの講義のかわりに、男女の学生たちを引きつれて浅草の街に出

かけた。小林秀雄は二十分も遅れて教室に入ってきて、椅子に腰を下ろすなり煙草に火をつける。そのまま数分間が過ぎると、『質問ないの。なければ帰るよ』とじろりと学生を見る」(前掲書)

どちらも、どれほど自由に授業が行われていたかを伝えるエピソードだろう。

一九三一(昭和六)年の満州事変以来、日本は急速に全面戦争への道を歩んでいた。それと同時に、文部省の指導の下、国家主義的な教育へと傾斜していった。だが、文化学院はその姿勢を変えることはなかった。当時の講師に名を連ねたものの中に、三木清、田中美知太郎、清水幾太郎、美濃部達吉、吉野作造、といった偉大な学者たちを見ることができる。やがて、政府や警察が授業の監視をするようになった。それは、決して、学院の教師が社会主義思想を教えたからでも、内部に反戦思想が広がっていたからでもなかった。「自由にものを考える」こと、個人を大切にすること、それ自体が、社会の趨勢と相容れないものになっていたからである。そんな中、伊作は、「倫理」という授業をひっそりと受け持ち、雑談に近い形で、自らの「戦争」への思いを素直に話すことだけはやめなかった。

「昭和十八年四月十二日、雨の日に、伊作は特高課の刑事によって連行され、不敬罪ならびに言論出版集会結社等臨時取締法第十八条（時局に関し人心を惑乱すべき事項を流布したる者は一年以下の懲役若しくは禁固に処す）違反の疑いで拘禁された。学院の『精神講座』（伊作の雑談）の速記録が証拠であつた。速記録は十数冊にも及び、至るところに『君主はどんなものであるか。いろいろ学者の説があるが、私の考えて一番正しいと思うのは、君主は社交の中心人物であるという説である』、『我々は、皇后陛下からこじきの娘に至るまで、だれを愛してもよい権利を持つ』などの伊作のこゝとばが記録されていた。

昭和十八年九月一日、学院は強制閉鎖となつた。東京都長官の名で『私立学校令第十條ニ依り昭和十八年八月末日限り文化学院ノ閉鎖ヲ命ズ』という命令が代読され、理由として『教育方針が我が国是に合わないこと、しかしそれに就ては深く説明出来ないことを遺憾とする』とだけ発表された。

（略）

文化学院が閉鎖されて、生徒は三、四人ずつ散り散りに転校させられた……モンペ



千代田区神田猿楽町にある女坂。とちの木通りから、猿楽通り方面へと下がる急坂。

生活が変わって、学院がどんなに恵まれた別世界であつたかを初めて思い知った生徒たちが、『文化学院』の表札が取り去られたアーチの、打ちつけられた板戸の前を行きつ戻りつする姿が見られたという。

このころ、拘置所の薄い莫蔭もかげの上に膝を曲げて座って、伊作は静かに考えごとをしていた」（前掲書）

一九四六（昭和二一）年四月、文化学院は再開した。新しく学科が編成され、大学部が出来、六年間の一貫教育体制が整ってゆく。けれども、伊作は変わらず、一九六三（昭和三八）年に亡くなる直前まで校舎の一角に住み、その自由な空間を維持しつづけた。

現存する一四階建てのモダンなビルに変わる前の学院で講義をしたことがある。優雅で古めかしい校舎の中には、まだ、伊作が守ろうとした「大正自由主義教育」の名残りが感じられた。その数年後に、アーチだけを残した新校舎になり、そこから二〇一八（平成三〇）年の閉校までは一直線の道のりだった。個人の自由を徹底的に重んじた文化学院の教育は、軍国主義下のこの国だけではなく、経済発展こそ至上の価値となった戦後、そして、

さらに、自由より自己責任を求めるようになったこの国でも、不要のものとなったのである。

文化学院の跡から、とりとめなく、あたりを歩いた。お茶の水から神田にかけて、こんなにも坂があることに、わたしは気づいていなかった。また、古い建物や教会があることにも。文化学院は、この地の「上」から、ずっと「下」の世界で起こることを見つけていたように思える。

あの頃、「下」で走り回っていたわたしたちを、いまはもうないあの建物は、どんな思いで見つめていただろうか。いまとなつては想像することしかできないのだが。

失われたTOKIOを求めて
高橋源一郎・著

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）
定価：880円（10%税込）
発売日：2022年4月7日
ISBN：978-4-7976-8097-3

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)